

うたごえ新聞

12/23

(1996年)

NO. 1602

THE SINGING VOICE OF JAPAN (UTAGOE)

日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒100 東京都新宿区大久保2-16-36
☎03(3209)0638 FAX03(3200)0105
振替口座 00120-6-5631 毎週月曜日発行
1部154円・税込(〒40円)・月615円・税込(〒160円)



▲微笑みかける井上先生の遺影に向けて献花。◎日本のうたごえ有志による合唱

参加者を代表して三氏からの「お別れのこぼし」は、先生のお古からの友人、室内楽を組んだ松本善三氏、桐朋大学の同僚でロシアとの音楽交流でも一緒に活動された音楽評



井上頼豊さんとお別れする会 1000人

「音楽の高き美しさと、個性のゆたかな魅力をお寄せ持った合唱団がふえてほしい」を初め、21世紀のうたごえ運動に期待する三つのこと(本紙12月9日号)を残して、先月亡くなられたチェリスト井上頼豊先生。

日本のうたごえ運動草創期から一貫して指導・協力にあたっていただいた先生は、日本を代表する現役最長老のチェリストであり、桐朋学園大学名誉教授他、後進の指導に

開会前、井上先生の「鳥の歌」が静かに流れるホールのステージは、先生愛用のチェロとそのチェロと共に微笑む

先生の遺影が飾られ、1000人が集まったお別れ会の最後は参加者一人ひとりの色とりどりの献花が覆った。司会の作曲家・林光氏の、「15歳の井上さんをチェロに誘い、49歳の井上さんが生涯ただ一度のレッスンを受けた巨匠・P・カザルスを冠するホールで今日のお別れ会が開かれることはまことに天の介在としか言いがありません。音楽家のお別れ会に、さわしく音楽に包まれ進歩する歴史を紹介。」

人間のやさしさ

教えた井上頼豊先生

苦悩を通じた愛 葛藤を越えた祈り

三善晃 (作曲家)

お知らせ
本年も愛読ありがとうございます。次号は第5週につき休刊となります。今年最後になります。新年号96年1月6日・13日号は、書の12月27日に本局発送とします。来年もよろしくお祈り申し上げます。
うたごえ新聞社

論家の寺西春雄氏。元桐朋音

この後長い列の献花に移り、その間、井上先生門下生によるチェロ演奏、桐朋学園大学の先生方による弦楽四重奏、日本のうたごえ合唱団は全国から参加した80人による井上頼豊編曲の「バイカル湖のほとり」、「わが母のうた」

「アヴェ・ヴェルム・コルパス」を指揮、関西合唱団常任指揮者の守屋博之氏で演奏。井上先生の演奏のパートナーでもあるピアニストの村上弦一郎氏は、「今日の会には参加者一人ひとりがそれぞれに一本の糸で井上先生と結ばれていることを感じる。考えてみることはいつも先生のコンサートの際の雰囲気と同じです。作曲家、演奏者、聴衆が一緒に音楽を作っていく姿。こういう姿勢を私たちが受け継いでいきたい」

そんな思いをかみしめた先生のお別れの会であった。

大きな足跡を思う。つづく献奏は先生門下生より刈田雅治、長谷川陽子さんからチェリスト6人によるD・ポッパー作曲の「レクイエム作品66」

お礼のこぼしに立った妻の仰子さんのあいさつも参加者の心に深く刻まれるものだった。「ピアノの筆頭、生徒の筆頭である私が耐えて前向きで歩いてまいりますから」と

その後各地で合唱曲「砂川」「日本の夜明け」「大合唱沖繩を返せ」そして一九六九年、歌劇「沖繩」の初演を指揮され、直接先生の合唱指導を受けたものは、きびしさという言葉だけでは言い表せない、音楽に対して真摯な態度、妥協を許さない信念にみちた先生の姿に自分を結ぶものを見たのではない。

せめてその一片でも自身を通じて表現出来たらと、井上先生を送る今考え

今週の記事

- ☆特集 今、職場に変化が起きている！50周年へのステップ東京の職場のうたごえ祭典／歌と共に勝利・東電合唱団／高崎に響いた700人の電通のうたごえ祭典、他 4・5面
- ☆ユニヴァーサルな歌い手 ハリー・ペラフォンテ 3面
- ☆「連載」
「ミュージック・トゥデイ」(風早美樹) / 「となりの河童さん」(伊東章夫) / 試験室／楽譜 / 「空を見ますか」(池辺晋一郎)
- ☆「想像力は創造力」(ふじたあさや・演出家) 求められる賢治の世界 8面

